

## 並列表現史の一側面：「Vナカッターリ（スル）」形式の推移

京, 健治  
岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授

<https://doi.org/10.15017/8900>

---

出版情報：語文研究. 102, pp.1-13, 2006-12-15. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 並列表現史の一側面

——「Vナカッター（スル）」形式の推移——

京 健 治

## 1. はじめに

(1) 休みの日には映画を見たり買い物をしたりする。

この並列助詞「たり」は助動詞「たり」の終止形から転じたもので、中世前期以降見られるようになる。

(2) a 蘆舳にはしりまはり、掃いたりのごうたり、塵拾ひ、手づから掃除せられけり。  
(平家物語・先帝身投)

b 誰ニテモアレ、向敵トコソ軍ハスレ、近寄合給へ、互ノ手ナミ見タり見ヘタリセム。  
(延慶本平家・5本)

さて、現代語では用言性の語句の並列は「たり」によって専ら行われるのであるが、古くは助動詞「つ」「ぬ」にも同様の用法があった。たとえば、『古典語現代語助動詞助動詞詳説』の「ぬ」「つ」の項(大坪併治氏執筆)に次のような記述がある。

「ぬ」の用法は記・紀・万葉から源氏・枕などを経て平家あたりに至るまでほとんど変わらない。ただ「ぬ」を動詞「死ぬ」に続けることと終止形を並列助詞的に用いることが院政期以後に現れた新しい事実である。

「つ」の用法は奈良時代から鎌倉時代までほとんど変わらないが、終止形を並列助詞的に用いることが院政期に始まり、室町時代を経て江戸時代まで伝えられた。

(3) a 指ヲ差シツ、又仰又シテ語り居レバ、君達「アラへ」ト云テ、  
(今昔物語集・巻23・15)

b 萌黄、緋威、赤威、いろへの鎧の、うきぬしづみぬゆられけるは、神南備山の紅葉葉の、峯の嵐にさそはれて、竜田河の秋のくれ、みせきにかかつて、ながれもやらぬにことならず。(平家物語・宮御最期)

(4) a 文ヲヒロゲツ卷ツ千度百度ヲキツ取ツシテ臥マロビテヲメキ叫ヒテ悲ノ涙ヲソ流シケル(延慶本平家・2本)

b 僧都乗つてはおりつ、おりては乗つつ、あらまし事をぞし給ふける。  
(平家物語・足摺)

また、上記の助動詞「ぬ」「つ」「たり」以前において、動作の並列表現に与つたものとして、(5)の「～み～み」形式も行われていたようである。

(5) a わきばさむ 子の泣くごとに 男じもの 負ひみ (見) 抱きみ (見)  
朝鳥の 音のみ 泣きつつ... (万葉集・巻3・481)

b 生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず、朝より曇りて、  
昼晴れたり。 (伊勢物語・67段)

『日本国語大辞典』(第2版)「み」の項に、(動詞または助動詞「ず」の連用形に付き、その並列によって連用修飾語を作る。対照的な動作または状態を併列して、それが交互に繰り返される意を表わす。…したり、…したり。…したり、…しなかつたりして。)とあるように(5) bは「曇ったり晴れたり」のように現代語にいうところの「～たり～たり」形式に相当する語法である。

動作作用の並列形式は「VみVみ」使用の段階から「VぬVぬ/VつVつ/VたりVたり」3者併用の段階を経て、現代語に見るような「VたりVたり」形式へ収斂したということなる。こうした変遷過程については語レベルから句レベルの並列へと推移するという観点からの史的考察が岩田美穂氏にあり、示唆される点が多いが、<sup>(注1)</sup>動作作用の並列形式の推移に関しては、以下に示すような検討課題もあるように思われる。

現代語にいう「Vナカッタリ(スル)」という言い方は、助動詞「ない」がその活用形を整備していく江戸時代後期以降行われるようである。

(6) a 誠に旦那が、居たり居なかつたりするので、<sup>(注2)</sup>(春色江戸紫・1864年)

「Vナカッタリ(スル)」という言い方は江戸時代後期以降成立したことになるが、こうした表現形式の成立以前、江戸語では如何なる形式が使用されていたのか。また、否定表現に「ん(ぬ)」を使用する京都を中心とする上方語では如何なる形式が行われていたのかなど、考うべき余地がありそうに思われる。

そこで、本稿では「行かなかつたり(する)」のような「否定表現+たり」形式を取り上げ、その史的変遷について少しばかり考察を加えてみようと思う。

## 2. 「VたりVなかつたりする」形式の諸相

ここでは、まず「Vナカッタリ(スル)」という意味用法に使用されていたと思しいいくつかの表現形式を見てみることにしたい。

第1節で見たように「ぬ」「つ」「たり」による並列助詞的用法に先んじて、「～み～み」が行われていたが、この形式に「VみVず(み)」の形も見られる。

(7) a その妻の子と朝夕に笑みみ(美) 笑まずもうら嘆き

(万葉集・巻18・4106)

b また、この男、いひみいはずみ、ものいひすさぶる人ありけり。

(平中物語・32段)

c 法師ばら童などの登り行も、見えみ見えずみ、いと雪深きを泣く泣く立ち出でて見送り給。

(源氏物語・椎本)

d 神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の始なりけり

(後撰和歌集・445)

また、中世室町期以降、(8)に示す否定過去として助動詞「なんだ」が一般的になるが、この助動詞「なんだ」との関係がありそうな「ナンダリ」が並列用法に使用されている<用例(9)>。

(8) a 夜は蚊が食ふ、明日と、逃げんとすれば 引留め、気がつかなんだ。

蚊が食はう、蚊帳へおぢやと抱入るゝ (薩摩歌)

b 余所の笠とかはつて、詮議しても知れなんだ。 (五十年忌歌念仏)

c 小まん、この中逢はなんだ。無事で嬉しい。(丹波与作待夜の小屋節)

(9) a 物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ (浮世床)

b 「ふりみふらずの心で、あびたりあびなんだり、かけたりかけなんだりさ」 (浮世床)

c 「へりふんだりふまなんだりぢやアねへか」 (浮世床)

d 尿も教たり教なんだりで (浮世床)

e はじめのうちは実めかして如在のねへ客のやうたがしめへの太平樂が心ほどにやア口がまはらなんだりするからうつぜ (後編姪意妃)

(9) c の「ふまなんだり」は「(縁を)ふまなかつたり」、(13) e は「口がまわらなかつたりする」という意味に使用されている。

(9) は江戸期の例であるが、これより以前に「ナンツ」の例も見られる。<sup>(注3)</sup>

(10) 星カミヘツ、ミヘナンツシテ稀ナルソ (四河入海・9ノ1・10ウ)

この「星カミヘツ、ミヘナンツシテ」も現代代語にいう「星が見えたり、見えなかつたりして」に相当する用法である。

以上、「Vナカッタリ」という意味用法に使用されていると思しき「Vズミ」「Vナンツ/Vナンダリ」を見てきたのであるが、ここで、「Vナカッタリ(スル)」という意味用法に与る諸形式を使用時期との関係から配すると以下のようになる。

(11) 「VみVずみ」

[また、この男、いひみいはずみ、ものいひすさぶる人ありけり。(平

中物語・32段) ]

「VつVざりつ」

[明滅ト云八見ツ見ヘサリツスルヲ云ソ (四河入海・17ノ1・43ウ)]

「VつVなんづ」「VたりVなんだり」

[星カミヘツ、ミヘナンツシテ稀ナルソ (四河入海・9ノ1・10ウ)]

[物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ (浮世床・初中)]

「VたりVなかつたり」

[太郎は体調によって来たり来なかつたりする。]

上記の推移は第1節に見たところの動作作用の並列形式の推移に準じているが、その変遷の途次、否定過去の助動詞「なんだ」と関係しそうな「ナンヅ」「ナンダリ」も見られるなど、その推移のあり方について少しばかり気になる点がある。並列用法に使用される「ナンヅ」「ナンダリ」については、前稿にて助動詞「なんだ」の活用形の拡充に関わる考察の中で取り上げた<sup>(注4)</sup>。そこで、「Vナカッター(スル)」形式変遷の理由を考える前に、次節では並列用法の「ナンヅ」「ナンダリ」の性格を見ておくことにしたい。

### 3. 並列用法の「ナンヅ」「ナンダリ」

助動詞「なんだ」の活用形を『日本文法大辞典』より引用して示す。

(12) [未然形] 何故うち明けて一言でも言ツて聞かせて呉れましなんだらう

(いろは文庫・68)

[連用形] 最前から色々な物かせといへども、かさなんぞござる程に

(虎明本・鍋八撥)

物しつたり物しらなんだり、物しり物しらずサ

(浮世床・初中)

[終止形] 御次に居まして御座るが、御声を承りませなんだ

(虎寛本・武悪)

[連体形] これほど面白いことを、今までしらなんだが、残念

(浮世床・初中)

[已然形] 死んだごとくに動かなんだれば、そこを退いた。

(天草版伊曾保・471・1)

(12) に見るように助動詞「なんだ」の活用形は「ナンダラ/ナンデ・ナンダリ/ナンダ/ナンダ/ナンダレ/」となっており、助動詞「た(り)」に準じた活用形を有するようであるが、こうした活用形は成立当初から存してい

たようではなさそうである。

『史記抄』では (13) の「ナンダ」、(14) の「ナンダシ」が見える。

- (13) a 其カラヤミツイテ一年アマルナヲリエナンタソ (史記抄・6・69才)  
b 韓ヲ八諸侯モヲカサナンタソ (史記抄・10・18才)  
c 秦王八終二殺ハセラレナンタハ秦王モ我父ト知ラレタケル歟  
(史記抄・4・9ウ)  
d 何語ヲシタトモキコエナンタカ (史記抄・4・12ウ)  
e 儒者ノ堯舜ノ時ハサハサウナンタナント、云様ニハナイソ  
(史記抄・19・11才)
- (14) a 沈メタレトモ後悔セナンタシソ (史記抄・11・47才)  
b 沛ノ中テ豊ハカリヲ復セラレナンタシモノソ (史記抄・6・8才)  
c 昭帝ハ太子ヨリ昌邑王ハ幼サニマタ此時ハ封セラレモセナンタシモノソ  
(史記抄・19・39ウ)

これに続く『天草版平家物語』では、「ナンデ」「ナンダレ」の形も行われているように徐々に活用形を拡充していく様相が見て取れる。

- (15) a 今度は何と思はれてござるか、つひにかうとも知らせられなんでござる。  
(p118・4)  
b 平家の悪いことどもをたとひ目に見、心に知れども、ことばにあらはれてはえ申さなんだ。  
(p12・13)  
c 北の方はこのごろはこれ程に情けなからう人とは思はなんだと言うて、  
(p187・3)  
d なぜに重盛に夢ほどなりとも知らせなんだぞ？ (p17・18)  
e 昔はあの人々に訪はれうとはつゆも思ひよりませなんだことをとあつてお涙にむせばせらるれば、  
(p399・13)  
f 人は見つけなんだれども、子どもの首をばみなたづね出した。  
(p136・14)  
g ただもの悲しいつ歸らうとも知れなんだれば、心細さは限りがなかったと、聞えました。  
(p195・6)

『史記抄』の様相に対して、『天草版平家』では活用形の整備がはかられていく様相がうかがえるが、こうした活用形の整備は以下のように考えられるのではないと思われる。

(14) の「ナンダシ」の「タシ」はその語構成からすれば、助動詞「たり」+過去の助動詞「き」の連形「し」である。「～タシ」は本来的に見れば「た

り」 + 「し」の二語であるが、この時代、「たし (たりし)」は一語的な助動詞という性格になっており、その意味も過去時制を表していると考えられる。<sup>(注5)</sup>

「ナンダ」は過去・完了表現形式の歴史的趨勢にあつて、「たし (たりし)」から「た」へと推移したのと連動し、「ナンダシ (ナンダリシ)」から「ナンダ」が生まれたのではないと思われる。『史記抄』に「ナンダシ」「ナンダ」の二形が見られるが、これは「ナンダシ」から転じた「ナンダ」との併用の段階を示しているのではなからうか。助動詞「なんだ」の活用には後世、「ナンダレ」「ナンダラ」も見られるようになるが、これらは終止連体形の「ナンダ」の形をもって、助動詞「た」の活用に倣うかのように、再活用によって成立したものであろう。さらに、並列形式「ナンダリ」は過去表現と並列表現との対応関係を基にして生じた語形であろうと思われる。

(15) 踏んだ：踏まなんだ = 踏んだり：踏まなんだり

なお、「ナンダリ」に先行して「ナンツ」も見えるが、これも (16) の対応関係より成立した語形であろうと思われる。

(16) 踏んだ：踏まなんだ = 踏んづ：踏まなんづ

#### 4. 「Vなかつたり (する)」形式の推移

第2節で見たように、「Vなかつたり (する)」形式は「Vズミ」「Vザリツ」「Vナンツ」「Vナンダリ」「Vナカツタリ」へと推移しているといえよう。ここではそうした変遷の理由について考えてみることにしたい。

(17) a 人やりにもあらねば、念じかへせど、え堪えず。泣きみ笑ひみ、よろづのことを言ひ明かして、  
(蜻蛉日記・中巻)

b この頃の日、照りみ曇りみ、いと春寒かる年とおぼえたり。

(蜻蛉日記・下巻)

c 南には、やむごとなき僧正・僧都かさなりあて、不動尊の生きたまへるかたちをも、呼びいであらはしつべう、たのみみ、うらみみ、声みなかれわたりにたる、いとみじう聞こゆ。  
(紫式部日記)

d 活けみ殺しみいましめおはする御さま、尽きせず若くきよげに見え給。

(源氏物語・蛸)

奈良時代から院政期に行われていた「～み～み」であるが、これも助動詞「ぬ」「つ」「たり」の終止形による並列助詞的用法の発生に伴い、(18) (19) に見るように「～み～み」から「～ぬ～ぬ」「～つ～つ」「～たり～たり」の形で行われるようになっている。

- (18) a 飛鳥ひすこしうたひて、月ごろの御物語り、泣きみ笑ひみ、「……」  
 など語り給ふに、耐へがたくおぼしたり。 (源氏物語・須磨)
- b 「こぞの今日は都を出でしぞかし。程なくめぐり来にけり」とて、あ  
 さましうあわたたしかりし事共宣ひいだして、泣きぬわらひぬぞし給  
 ひける。 (平家物語・藤戸)
- c ……を思ひだいて語りだし泣いつ笑うつせられた  
 (天草版平家物語・4・15)

- (19) a わきばさむ 子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 音  
 のみ泣きつつ… (万葉集・巻3・481)
- b みな人は重き鎧のうへに、重き物を負うたりいだいたりして入ればこ  
 そ沈め、この人親子はさもし給はぬうへ、なまじひにくつきやうの水  
 練にておはしければ、沈みもやり給はず。 (平家物語・能登殿最期)

「～み～み」は先述の如く2つの動作を列挙し、その意味も反復を示すもの  
 であったが、「～つ～つ」「～たり～たり」では(20)のように3つ以上の動作  
 作用(事態)が列挙されたり、(21)のように「Aという事態もあるし、Bと  
 いう事態もある」のように複数の事態を並立する用法が見られるなど、用法に  
 広がり認められる。こうした並列の機能差が「～み～み」の衰退を促したの  
 であろうと考えられる。<sup>(注6)</sup>

- (20) a 「さらばかたきの聞かぬさきに寄せや」とて、かけ足になつつ、あゆ  
ませつ、はせつ、ひかへつ、阿波と讃岐とのさかひなる大坂ごえとい  
 ふ山を、夜もすがらこそこえられけれ。 (平家物語・勝浦)
- b 宰ト云八調菜人ノ物ヲキツツ煮ツ盛ツスル様ニ  
 (史記抄・5・24才)

- (21) a みな人は重き鎧のうへに、重き物を負うたりいだいたりして入ればこ  
 そ沈め、 (平家物語・能登殿最期)  
 「～をV1たりV2たり」

b 湯アヒツカミアアラウツナントセウズ (史記抄・10・67ウ)

「A(を)V1たり、B(を)V2たり」

- c よるになればしうとが馬ひきいだいてはせひきしたり、海の底十四五  
 町廿町ぐりなんどしければ、地頭、守護あやしみける程に、何とし  
 てかもれ聞えたりけん、鎌倉殿御教書を下されけり。

(平家物語・六代被斬)

ちなみに「～ぬ～ぬ」形式は早く衰退したようであるが、この形式が「～み



～み」と同様に反復形式であったことによると思われる。

こうした「～み～み」から「ぬ」「つ」「たり」による並列助詞的用法への移行に伴い、「Vズミ」に代わり、「Vザリツ」が行われるようになる。

さて、中世室町期以降には先述の如く、助動詞「なんだ」を介したと思しい「ナンツ」「ナンダリ」という並列形式も見られるようになってきている。こうした語形の成立には、否定過去表現が「ザリ系」から「なんだ」へと推移することに関係がありそうと思われる。すなわち、否定過去表現形式がザリ系「ザッタ」から「ナンダ」へ移行するに伴い、「行かなかつたり(する)」という並列表現形式も「ザリツ」から「ナンツ」「ナンダリ」へ移行したのではないかと思われる。

否定過去表現形式として、室町期以降、「なんだ」が一般的になるが、それ以前には、

(22) a ミエザツタナリ (詩学大成抄・1・53才)

b ワルウテキサツタソ (詩学大成抄・2・82才)

の「ザッタ」がこれに与っていたが、「なんだ」の定着に伴い連用形「ザリ」の使用頻度も低下していくようである。『天草版平家物語』における否定表現の使用状況について、江口正弘氏によれば、(助動詞「ズ」の連用形には「ざり」が2例、「ず」が255例、「ず(ん)」が3例見られ、「ず」が圧倒的に多く、(当該資料に見える「ざり」は文語的な言い回しでの使用である)という。<sup>(注7)</sup>

(23) a つひにかくそむきはてける世の中をとく捨てざりしことぞくやしき。

(天草版平家物語・65・9)

b いとほしやいにしへはこのおん様にて東方へ下り給ふべしとは、夢にも思はざりしことをと申して、一首の歌をぞ奉る。

(天草版平家物語・299・13)

室町期以降、「なんだ」が否定過去に与ようになり、「ザリシ(連用形「ざり」+過去表現「し」)」「ザッタ」は衰退するのであり、上記のように連用形「ザリ」自体も使用頻度が低下するに至り、並列形式「ザリツ」もそうした流れにあって、衰退していくことになったのであろう。並列形式の「ナンツ」「ナンダリ」はそうした否定過去表現形式の推移の中で成立したと考えられる。

以上、並列形式の「ナンツ」「ナンダリ」の成立の背景について考えてきたのであるが、この形式は近世江戸語では「Vナカツタリ(スル)」の形で行われるようになる。

## 5. 助動詞「ない」の展開

ロドリゲス『日本大文典』に助動詞「ない」について以下の記述がある。

- (24) 打消には Nu (ぬ) の代りに動詞 Nai (ない) を使ふ。例へば  
Aguenai (上げない) Yomanai (読まない) Narauanai (習はない)  
Mōsanai (申さない) など。

(「ある国々に特有な言ひ方や発音の訛について - 関東又は坂東」の項)

助動詞「ない」に関する記述としてはもっとも早いものであるが、ここに見られるように江戸時代初期には関東方言に「ない」が特徴的であったことが知られるのであるが、その初期例は終止連体形「ナイ」及び接続形式「ナイデ」である。近世前期の東国系抄物と『雑兵物語』(1667 - 1683) の「ない」の例を以下にいくつか示す。

- (25) a 極マレバ陽来覆シテ回互宛転環キノ如ク論ジナイゾ

(天南代抄・二六八ウ)

- b 何ノノタワ言トヲツク一旬二踏ミ殺シテ捨テナイデムダ事ヲツカスル  
ヨト

(天南代抄・二七二ウ)

- (26) a 鉄砲は、腰には中々はさまれない。 (雑兵物語・上19才)

- b 弓が射られないものだ (同・上5ウ)

- c 捨てないで、よくしておけ。 (同・下9才)

助動詞「ない」が今日見るような活用を持つようになるのは江戸時代後期以降である。

- (27) a ゆびがどこかとんで見えなくなったのさ (古契三娼)

- b 余程いそがなければならねへ (春色梅児誉美・四)

- c けふはなぜ久しく屋敷へは出なかつたか (楠下埜夢)

こうした活用形の拡充について、本来的には 動作の否定 を表していたものが、(28) に示したような「すかない」「いけない」の如き評価的な表現に転じたことがその契機となったとする見解が坂梨隆三氏に<sup>(注9)</sup>ある。

- (28) a すかないがきどもだぞよ (遊子方言)

- b いけないへくちだよ (傾城買四十八手)

このような「動詞+ない」が評価語的表現に転じたものを契機として、形容詞型活用を有するようになり、否定過去表現も「Vナカッタ」となる。

- (29) a けふはなぜ久しく屋敷へは出なかつたか (楠下埜夢)

- b どふもまた芸を磨いたものばかり、みがゝねへじやアならなかつたそ  
うだから (春色辰巳園)

c 私きやア其意味にやアさつぱり気が付かなかつたヨ (春告鳥)

江戸語でも否定過去に「なんだ」が使用されていたが、「動詞未然形 + なかつた」の形が天保年間 (1830 ~ 1844年) 頃に現れるようになり、それに続き「Vナダリ」に代わり、前掲 (6) のように「Vナカッタリ (スル)」の形も行われるようになる。

## 6. おわりに

以上、「Vナカッタリ (する)」形式の変遷について、粗々であるが、追ってきた。その推移の過程を改めて提示すると以下の通りである。

- (30) 「(Vみ) Vずみ」  
「(Vつ) Vざりつ」  
「(Vつ) Vなんづ」「VたりVなんだり」  
「(Vたり) Vなかつたり」

上の変遷のあり方から見て注意されるのは、 であり、特に 段階の「ナンツ」「ナダリ」であろう。これらは先述の如く、否定過去の助動詞「なんだ」を介してなった語形であり、否定過去表現「ザリ系 (ザツタ)」から「なんだ」という否定過去表現形式の変遷と関係があるのではないかと考えられる。江戸語においてもこれまで述べ来たった如く、否定過去は「ナダ」がこれに与っていたが、助動詞「ない」がその活用形を整備していき、「ナカタ」の形で行われるようになり、これに連動するように並列形式も「Vナダリ」から「Vナカッタリ」へと推移するのである。

### (31) 否定 (過去) の推移と並列形式との関係

否定過去 / 並列 (否定)

- a 知ら ざった / 知ら ざりつ  
b 知ら なんだ / 知ら なんづ・知ら なんだり  
c 知ら なかつた / 知ら なかつたり (江戸語)

江戸語の「Vなかつたり (する)」形式の変遷については、当該方言の否定表現のあり方との関わりなど考うべき課題が多く、なお詳細な調査検討が必要であるが、『浮世床』等の江戸語資料に「ナダリ」の使用が見られることから、少なくとも上記 b から c へと移行したということは言えそうである。

以上、「Vなかつたり (する)」形式の変遷過程を見てきたのであるが、その変遷の途次、否定過去の助動詞「なんだ」を介した形で「ナンツ」[ナダリ]という並列形式も行われ、さらに江戸語に見るように「Vなんだ」から「Vな

かった」への移行に伴い、並列形式も「Vナンドリ」から「Vナカッタリ」へ推移するなど、否定過去の推移との関連が認められる。

否定過去表現形式の推移との関連をみると、現在方言における「Vなかつたり（する）」形式の様相やその変遷過程に関して、いくつかの課題がありそうに思われる。

関西方言では否定過去表現が「なんだ」から「(へ)んかった」へと転じており、並列形式も「(へ)んかつたり」が行われているようである。こうした言い方がいつ頃から行われたのかという関西方言での推移について考える必要がありそうに思われる。さらに、否定過去との連動という観点からすれば、九州方言における否定過去形式と並列形式との関係についても検討の余地がありそうである。九州方言の否定過去については、『九州方言の基礎的研究』に調査項目39/設問《「どこへも行かなかった。」というときの「行かなかった」は、どのように言いますか。》との項目がある。この調査図及び各県毎の記述からすると、この地方では否定過去に「なんだ」が使用されなかったのではないかと<sup>(注10)</sup>思われる。すなわち、「ザリ系(ザッタ)」から「ンジャッタ」「ンカッタ」へと移行したのではないかと<sup>(注11)</sup>思われる。そのように考えることが出来るとすると、並列形式も京都語や江戸語で行われた「ナンツ/ナンドリ」もおそらく行われず、それらの地方とは異なる展開を見せたとも推測される。今後は西日本方言・東日本方言の史的展開について、より精緻な調査・考察が必要であろう。

以上、本稿では「Vなかつたり（する）」形式並列表現史の一端を取り上げた。東国方言の史的変遷などの状況については江戸期を中心にした記述に留まっており、検討の余地が多々あろう。こうした各方言の個々の変遷に関わる諸問題は今後の課題としておきたい。

#### 注

- (注1) 岩田美穂氏「並列表現の史的展開」2006年5月14日 日本語学会(於東京学芸大学) 口頭発表
- (注2) 金沢裕之氏「なかつた」新考(『国語学』196集)
- (注3) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』に指摘がある。
- (注4) 拙稿「否定過去の助動詞『なんだ』に関する一考察」(『語文研究』96号/2003.12)
- (注5) 『岩波講座日本語:文法』に以下の記述がある。  
助動詞をいくつか重ねた形の表現は、時の助動詞で言えば、「たける」「たし」「たつし」となることもある」という形が見られる。それぞれ、「たりける」「たりし」から転じたものあることは明らかである。この続き方が、この時期(=鎌倉室町時代...京注)における特異なものとも言えないのであるが、ただ、この形

が一語の助動詞的な使い方によって変わって来ている点に注意しておきたい。

- (注6) 拙稿「並列表現形式の発達とその契機」(『国語と教育』長崎大学国語国文学会第31号/2006.12刊行予定)、(注1)岩田氏発表レジュメ。
- (注7) 江口正弘氏『天草版平家物語の語彙と語法』
- (注8) 柳田征司氏『室町時代言語としての抄物資料』
- (注9) これ(=助動詞「ない」の活用形の整備...京注)を押し進めた要因の一つとして「いけない」「つまらない」「すかない」という語の存在が考えられるのである。これらの語に含まれる「ない」はもともと動詞「いける」「つまる」「すく」に付いた打消の助動詞であるが、意味的に見ると一語化した形容詞のような印象をも与える。江戸時代後期、「いけない」は「行くことができない」という意味よりも「よくない」の意で用いられることが多い。「いけない」「つまらない」が一語の形容詞のように認識されるようになると、これが「いけなく」「つまらなく」という形をとるのは自然なことである。そしてまた、「いける」「つまる」「すく」はなお動詞としての用法もあったので、例えば「いけない」の「ない」は打消の助動詞のようでもあり、形容詞の一部のようにも見えたであろう。打消「ない」の活用と形容詞「ない」の接近はこのようなところにも一因があると思われる。(『日本語の歴史』東京大学出版会) (波線は京による)
- (注10) 『九州方言の基礎的研究』における各県毎の記述は以下の通りである。

【福岡】

筑前・筑後にジャッタが行われるが、筑前域ではジャッタを押さえてンジャッタの頻度が高い。一方イカヤッタ・イカンヤッタとヤに言うことも女性や年少者には盛んである。豊前域ではジャッタの勢力が強いが老人はジャッタの源とも思えるザッタをも併用し、年少者はンヤッタである。

【佐賀】

打消の過去は「書かなかった」について例をあげると、佐賀地方ではカカンジャッタ・カカンヤッタを用い、新しくカカンカッタも広がりつつある。東松浦地区の一部(11など)にカカランダッタがあり、鳥栖地区ではカカジャッタを用いる。

【長崎】

陸地部では、老の「～ンジャッタ」(全県)、少の「～ンジャッタ」(県南)と「ンヤッタ」(県北)の分布が目につく。島嶼部では、上五島の老・少に「～ンジャッタ」、「～ンヤッタ」があり、平戸には「～ンジャッタ」が認められる。一方、上対馬では、老の「～ザッタ」、少の「～ンカッタ」が目をはく。壱岐の老には、「～ジャッタ」、「～ッタ」があり、少には「～ンダッタ」、「～ンジャッタ」、「～ヤッタ」が見られる。

【熊本】

打消過去の～ザッタは阿蘇郡老人層のみ、劣勢。～ンダッタ・～ダッタ・ンジャッタ・ジャッタが基本である。～ンヤッタ・～ヤッタは芦北・球磨郡に。

【鹿児島】

ンジャッタを主流に、ンヤッタ・ンナッタ・ンヤッタなどが有力。出水、長島地方はイカダッタ、イカザッタ、もある。甑島の南のイカンラッタは直接～ンジャッタ、～ンダッタのいずれかの転であるが、決められない。なお、鹿児島市の若い層はイカンジャッタを用いず、イカンカッタしか使わない。

【宮 崎】

本来、日向はイカザッタ、諸県はイカンジャッタである。しかし新しい言い方イカンカッタが、日向のほぼ中部から南部へかけて老年層にも現われてきており、少年層はほとんどそれ、諸県でも少年層はそれに移行しつつある。

【大 分】

動詞の打消しの過去形は、県北は奥地、県南は全般に、行カザッタ、来ザッタ（老）というが、これが古い形と見られる。今は、しかし、行カンジャッタ、来ンジャッタがふつうである。別府湾周辺の県中心部では、若い話手が行カンカッタ、来ンカッタと言ひ、これが次第に広く行われようとしている。

(注11) 拙稿「否定過去表現史研究の一視座」(『岡大論稿』第32号/2004)

拙稿「否定の助動詞『ない』の来源再考」(『島大國文』30/2003)

[付記] 本稿は筑紫国語学談話会(2004.8月)及び岡山国語談話会(2006.10月)にて行った口頭発表に加筆修正を加えたものである。席上、両会員諸氏より貴重なご意見を賜った。記して感謝申し上げます。

(きょう けんじ/岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授)